川のほとりで人びとを讃え続ける人

山本衞エッセイ集『人が人らしく―人権一〇八話』

鈴木比佐雄

1

山本衞さんは、人を愛し、人の美点を生かそうとする教育者だ。山本さんにかかると、気取りや衒いの仮面は脱ぎ捨てられて、人は固有名を持った素顔を曝け出して輝き始める。山本さんの文章の魅力は、人が自分の素直さを取り戻すために、時に懐かしく想起され、人から与えられた感動を胸に秘めた、真実の言葉であるだろう。

山本衞さんは、四万十川のほとりの小学校の教師・校長を長年務め、その間には高知県幡多地区の社会教育にも尽力してきた。それらの現場の経験を踏まえて、四万十市の広報誌に平成十二年から九年間も毎月一回連載をしてきた。その人権啓発のエッセイ「人が人らしく」の一〇八話を集めたものが本書である。一〇八話とは、悩み多い煩悩を抱える人間存在を見詰めて共に考えていきたいといった、人の命を救い上げていこうとする仏教的な深い思いが込められているのだろう。

本書の成立に当たって、私はこの場を借りてエッセイが書かれた四万十市広報誌に九年間も毎月執筆させた四万十市の行政関係者の皆様と、その掲載を今も支援し続けている四万十市民たちに深い感謝の気持ちを伝えたい。山本さんに四万十川流域に暮らす人々の真実を伝えようとさせるコミュニティの力に敬意を表したい。きっと多くの四万十市民は山本さんを宝物のように育て愛してきたのではないかと私には思えてくる。山本さんは出会った人に誰よりも関心を持ち、その身近に存在する人の掛け替えのない素晴らしさを伝えるためにこの書を刊行したいと決意したのだろう。

2

私と山本さんとの出会いは一九九〇年代の後半で、偶然に上京の折に私の敬愛していた詩人浜田知章さんが東京の新宿で毎月開いていた「だべる会」で紹介されたのだった。山本さんは私と同様に浜田さんを師と仰ぎ、浜田さんの詩や生き方を高く評価していた。浜田さんは戦争中に高知出身の上官から「恩師の岡本弥太詩集だ」と貸してもらった。その詩集『瀧』を読み感動し、すぐにその全篇を筆記したというくらい弥太を尊敬していた。浜田さんは繰り返し岡本弥太との出会いを自分の詩の原点として語っていた。復員後に浜田さんは弥太を後世に残すために、

弥太が亡くなる前に構想していた未完の詩集『山河』の名前を借りて個人誌「山河」を発行し、弥太の詩精神を戦後の時代に生かそうとした。その「山河」は大阪の詩人たち、小野十三郎、長谷川龍生、牧洋子らを巻き込み同人誌となり、大阪の詩誌運動の中心的存在となった。また「山河」の浜田知章や長谷川龍生は、戦後の全国的な詩誌となった「列島」にも創刊時から大きな関わりをして戦後詩の歴史を切り拓いていった。「山河」の詩誌運動で最も先見性のあったことは、一九五二年の「山河」一二号の原爆詩特集だった。被爆していない詩人こそが原爆詩を書き、二度と核兵器を使用させてはならないという広島・長崎の平和思想を世界に広めるべく詩運動を提唱し実践したことだ。その原爆詩運動の精神によって結実された詩選集が、山本さんも参加されたコールサック社から発刊した『原爆詩一八一人集』（二〇〇七年刊）や『大空襲三一〇人詩集』（二〇〇九年刊）だった。その意味で山本さんは、浜田さんや私たちの詩運動の力強い同志であり、身近な目撃者でもあった。

山本さんは浜田さんを二〇〇〇年秋に開催した詩誌「ＯＮＬ」五〇号記念会の講演者として招待した。浜田さんが中村に着くと真っ先に促したのは、日本の自由民権運動を指導し社会主義思想を切り拓いた幸徳秋水の墓に詣でることだった。山本さんと私を連れて浜田さんが敬愛する秋水の墓を拝む姿を私は決して忘れることができない。山本さんのエッセイに血肉として感じられる人に敬意を払う人権思想が、二十世紀初めに帝国主義の問題点に警鐘を鳴らした秋水を生んだ高知の風土に脈々と流れる伝統でもあると考えるのだ。

山本さんは年齢的には私の大先輩であるが、敬愛する師を共有することで詩友の関係を築かせていただいている。四万十市に出向いた翌年の二〇〇一年には、私は『浜田知章全詩集』を山本さんたち支援者のおかげで刊行することができた。東京で開いた出版記念会に山本さんは遠方から出席してスピーチをしてくれた。それは誰よりも浜田さんを敬愛する内容で、私はその時の感動を今も忘れることができない。

二〇〇七年夏の『原爆詩一八一人集』が刊行された後に、山本さんに私は新詩集の発刊を提案した。山本さんとは九月上旬に岡山の詩人会参加に合わせて、詩集の打ち合わせをした。十月には栞解説文を書くために四万十川を一日かけて上流から河口まで一緒にお付き合いしてもらった。そして十一月に

は詩集『讃河』を刊行できたのだった。この詩集『讃河』は翌年の二〇〇八年に第八回中四国詩人賞を受賞することになった。四万十川やその流域の人々についてこれだけ愛情を持って書かれた詩の連作は今まで存在しなかった。その価値が中国・四国の詩人たちから高く評価されるのは当然だったろう。私は『讃河』の栞解説文「四万十川の人びとを衞り育てる人」を書きながら、山本さんの活動が一詩人の詩作をベースにした仕事を遥かに超えたエネルギーを持って、日々実践されていることを強く感じた。山本さんの四万十川流域の人々への深い愛情は、高知県の社会教育活動によって実現されてきたのだった。その活動内容を四万十市の広報に書き綴っていると山本さんからお聞きして、直観的にいつかこれを本にしたいという思いを抱いたのだった。私のそんなエッセイ集への提案に山本さんも詩集の反響などが落ち着き、連載が一〇〇回を超えたら本にしましょうと頷いてくれたのだった。コールサック社は私が詩論を長年書いてきたこともあり、編集の根幹のテーマに詩人を励まし詩を促すような生きた「詩論」シリーズを継続的に出してきた。そして二〇〇九年からは詩人が詩以外の他の得意な分野を分かりやすい名文で書

いた「詩人のエッセイ」シリーズを開始しようと考えた。そのトップバッターには山本衞さんのエッセイを企画したのだった。山本さんは快くこの企画案に賛同してくださり、この『人が人らしく――人権一〇八話』が実現する運びになった。

3

本書の魅力を少し語らせていただく。山本さんは、一章の冒頭のエッセイ1「プラスの感情」で「さべつ」を無くすためには親が「さべつ」をしない生き方をすることが大切で、その上で親が喜びや優しさ、人を思いやる心といった「プラスの感情」を「教えてやらなければ」いけないと明確に語っている。私たちの中にいつのまにか住み着いている「さべつ」を見つめると同時に、まず子供たちに親たちが「プラスの感情」を生きて模範を示さなければ決して「さべつ」はなくならないと提起するのだ。「さべつ」をしてきた歴史的背景を知る親の世代が「さべつ」をしないように肝に銘ずること、この考えかたは子を持たない一人の人間であっても社会生活において通用する間違いようのない真理であるだろう。山本さんのエッセイの根幹は実は人間の良心という理性に訴えているのであり、この

ような散文が実は物事を真剣に見詰める批判精神であると思われるのだ。

次に山本さんのエッセイの特徴は、人をほめたたえる愛情に満ち溢れている。この美点を発見する精神は山本さんが天性の教師であるからだろう。エッセイ22「裏と表」は福沢諭吉や太宰治たちが「桃太郎」や「コブ取りじいさん」の民話を逆の視点から解釈して物事を別の次元から見ることを紹介している。そして「グズな子」は「慎重に行動する子」であり、「落ち着きのない子」は「活動的な子」であることを親御さんに語っている。このような「立場を変えて物や人を見る」人を評価する柔軟性こそが、山本さんの愛情の根っこにあるように思われる。

エッセイ35「世界の中心」は学校に招かれた山本さんが子供たちの前でよく話されることが書かれている。山本さんは子供たちに「世界の中心はどこでしょう」と質問をする。すると子供たちはあらゆる知識を動員して「東京、ニューヨーク、パリ……」などと答えようとする。しかし山本さんは「世界の中心とは、今君が居る場所、君の生まれた所なのだ」と確信を持って答える。山本さんは高知県が東京から見れば田舎かも知れないが、その故郷に誇りを持てるような人間になってほしい

と自然に分からせていく。世界に通用する人物とは故郷の価値をしっかり自覚しているのであり、だからこそ世界からも尊敬されるのだということを子供たちに伝えようとしている。

またエッセイ67「お下がりのランドセル」は、死んだ祖父が姉に贈ったランドセルの物語を、妹にも引き継がせる話だ。物を大切にするということは、祖父の思いを伝えることによって、古さに固有の人間的な価値が宿っていることを山本さんは伝えている。このことは新しいものに価値を置き過ぎるきらいがある現代人に重要なことを示唆している。人を大切にするということは、子供に親が最も大切にしている人間的な価値観を分かりやすく伝え、いつか子供が人として誇れる生き方に寄与できる環境を用意していくことだ、と山本さんは語っているように思われる。

このように山本さんは、最も大切な「人が人らしく」生きていくための根本原理を実践的にこのエッセイで繰り返し語り続け、一〇八話以後もその試みは継続されている。この一見地味な人権というテーマではあるが、読めば静かな感動が溢れてくるエッセイ集を四万十市民だけでなく、日本国中の人びとに、社会教育に関心のある方はも

ちろんだが、日ごろあまり本を読まない方々にこそ手にとってもらいたい。そして山本さんが提起していることを暮らしの中で受け止めて参考にして欲しいと願っている。